

LTD 基盤型授業「討議法」の授業展開

－ 教員採用試験合格を意図して －

須藤 文 ・ 安永 悟
(久留米大学 教職課程) (久留米大学 文学部)

【キーワード】LTD, 集団討論, 小論文, グループワーク

1. はじめに

安永・須藤(2014)は、もともと文章読解の学習法として開発された LTD 話し合い学習法 (Learning Through Discussion: 以下、LTD と略す) を、「読解」のみならず「討論」や「文章作成」など言語技術一般の指導にも活用することをめざして「LTD 基盤型授業モデル」を提案し、授業の計画・実践・改善を続けている。

LTD 基盤型授業モデルは 3 段階で構成されている (安永・須藤, 2014)。第 1 段階は「読解」の段階で、LTD の概要と LTD 過程プランによる読解法と対話法を体得する。それを前提として、第 2 段階の「討論」の段階では、LTD 過程プランを活用しながら論を組み立て、討論を通して論理的思考を鍛える。最後の第 3 段階「文章作成」の段階では、LTD 過程プランに基づくレポートやエッセイの作成に取り組む。この基礎モデルに沿って計画された実践例として、看護学生を対象としたエッセイ作成指導をあげることができる (須藤・安永, 2014)。

LTD 基盤型授業 (基礎) モデルによる「読解」「討論」「文章作成」といった言語技術を磨く活動は、教員採用試験においても大きな力を発揮する。例えば、福岡県においては、一次試験で「集団討論」が行われ、二次試験では「面接」や「小論文」が行われる。多くの自治体においても似たような試験が行われ、論理的な言語技術が試されている。LTD 基盤型授業モデルに沿った授業を体験することで論理的な言語技術が高まることが知られており (安永・須藤・松永・徳田, 2014)、教員採用試験対策として極めて有効である。

そこで本報告では、教員採用試験合格を意図した LTD 基盤型授業「討議法」を紹介し、授業の展開方法を検討する。「討議法」は教職課程の科目として開講されている。

2. 教職科目「討議法」の概要

(1) 基本情報

本科目は 2016 年度後期開講 (全 15 コマ) の授業であった。受講生は 3 年生以上の学生 46 名 (女子 18 名, 男子 28 名) であり、授業者は第一著者であった。

(2) グループ編成

授業者が、男女・学部などを考慮し、できるだけ異質なグループ編成を行った。その結果、4 人グループ 9 班, 5 人グループ 2 班の 11 グループとなった。

(3) 基本構成

全ての授業において「個人思考・集団思考・クラス対話」を基本とする、協同による対話中心授業を試みた(安永, 2012)。

(4) 授業の到達目標

以下の4点を授業の到達目標とした。

①協同による活動性の高い授業に、積極的に参加できる。

②協同学習の基本的な理論を理解でき、代表的な技法を実践できる。

③LTDを実践し、文章作成や討論に活かすことができる

④学習内容を自己と関連づけ、大学生活を豊かに過ごす方法を考え実践することができる。

(5) 授業展開 (表1)

授業は「協同学習の理論」「読解」「集団討論」「小論文作成」の4段階とし、「協同学習の理論」の段階で学び方の基礎を、「読解」段階でLTDを修得させ、続く2つの段階でLTDを活用して「討論」を行い、「小論文」を作成した。

表1 討議法2016授業計画

講	月日	内容
1	9/21	仲間づくり、基本技法
2	9/28	これからの教育・協同学習とは
3	10/5	LTD(概要とステップ理解)
4	10/12	分割型LTD(導入)
5	10/19	分割型LTD(step4まで)
6	10/26	分割型LTD(step5から)
7	11/2	集団討論:見学
8	11/9	集団討論:準備
9	11/16	集団討論(1)
10	11/30	集団討論(2)
11	12/7	心理IS報告会・心理学用語
12	12/14	集団討論(3)
13	12/21	集団討論(4)
14	1/4	小論文:文章構成・作成
15	1/11	小論文完成、ふり返りとまとめ

3. LTD 基盤型授業「討議法」の展開方法

(1) 「協同学習の理論」段階: 第1-2講

① まず、授業の目標と授業15講の見通しを伝えた。これは、協同学習で重視している「単元見通し」である。単元見通しの手続きは、単元内の個々の学習目標の明確化だけでなく、集団の最終目標とそれに至る学習ステップまでも明示する(杉江, 2004)。

② 次に、自己紹介による仲間づくりを行った。その際、話し合いの基本スキルである「傾聴とミラーリング」について伝え、自分の言葉で説明できるようにした。また、協同学習の技法である「ラウンドロビン」と「シンク=ペア=シェア」を教えた。これらの技法は、協同学習のなかでも基本的で簡単な話し合いの技法である。それだけに活用範囲が広く、大きな効果を期待できる。ラウンドロビンの手順は次の通りである。

- i. 課題明示 教師が伝えたい内容を話した後、内容を理解させるために適切な質問(課題)をクラス全体に与える。
- ii. 個人思考 学生は一人で考え、質問に対する自分なりの回答を準備する。
- iii. 集団思考 グループ内で順番にほぼ同じ時間を使って一人ひとり自分の回答を述べる。そのうえで話し合っより望ましい回答を創り上げる。

ラウンドロビンの手順に含まれているこの三つの要素、すなわち課題明示・個人思考・集団思考は、協同学習の基本構造であり、すべての技法に共通する。また、ラウンドロビンが求めている「ほぼ同じ時間を使って一人ひとり自分の考えを述べる」という基本姿勢が大切である。

ラウンドロビンは3人以上のグループで集団思考を行うが、ペアで集団思考を行うこともできる。ペアで行う場合、特別にシンク=ペア=シェアと呼ぶ。両者は参加人数の違いだけである。それ以外はラウンド=ロビンと同じである。シンク=ペア=シェアは隣同士の学生をペアにするだけで使える。特別なグループづくりも必要なく、ラウンド=ロビンよりも、さらに使いやすい技法といえる。

討議法の授業では、毎回「ラウンドロビン」と「シンク=ペア=シェア」を基本とした話し合い活動を行った。

③ 協同学習の定義を伝えた後、協同学習の五つの基本要素を「ジグソー」で学ばせた。ジグソーとは、課題を分割して担当し、理解を深める協同学習の代表的な技法である。Kaganが基本要素として挙げている活動の同時性・平等性が高い技法でもある。

- i. 個人活動 : 担当課題を個人で理解する。
- ii. 専門家グループ : 担当課題を集団で理解する。担当課題の説明方法を話し合う。
- iii. ジグソーグループ : 一人ずつ、担当課題を説明する。チームで話し合っ理解を深める。

④ 毎時間、授業の感想を授業記録紙（A4一枚）に書かせ、次の時間の初めにいくつか紹介した。その感想等をもとに前時のふり返しを行い、体調確認を行うことを、毎回の導入活動とした。この活動は全ての段階のすべての授業で継続した。

(2) 「読解」段階：第3-6講

① まず、LTDの概要と目的、LTDの基礎について伝えた。次に、テキストを使ってLTDの基盤となるLTD過程プランをジグソーで学ばせた。LTD過程プランは表2に示した8ステップから構成されている。これらのステップを踏むことにより、LTDに期待される効果が得られる。

表2. LTD過程プランの8ステップ

段階	ステップ	時間**
準備	step 1 導入	3分
	理解	
理解	step 2 ことばの理解	3分
	step 3 主張の理解	6分
	step 4 話題*の理解	12分
	関連づけ	
関連づけ	step 5 知識との関連づけ	15分
	step 6 自己との関連づけ	12分
評価	step 7 課題文の評価	3分
	step 8 ふり返し	6分

* 話題とは主張を支持する根拠を表す。

**標準型LTDのミーティングは60分間である。

② 分割型LTDについて知らせ、実際に分割型LTDを体験させた。課題文は『ちょっと立ち止まって』（光村出版，2016）を採用した。分割型LTDは、「予習」も「ミーティング」も授業内で行うため、課題文の読み込み時間の確保が重要になる。今回は課題文に興味を持たせるこ

と課題文をよく読ませるために、分割型 LTD を実践する前に、「どんな絵が見える？」と「並べ替えよう！」という二つの活動を仕組んだ。課題文の挿絵だけを見て、どんなものが見えるか話し合う活動と、課題文を形式段落ごとにバラバラに並べ、正しい順番に並べ替える活動である。これらの活動を仕組むことで、課題文を何度も読むことができた。また、班での話し合い活動にも慣れることができた。

- ③ 課題文の作者の主張「固定概念にとらわれず見方を変えれば新しい発見がある」をもとに「知識との関連づけ」と「自己との関連づけ」を行った。関連づけのミーティングの際、技法「特派員」を使った全体交流も行った。「特派員」とは、グループで集団思考を行った後、グループ同士の考えを交流し、考えを広げたり深めたりするのに役立つ技法である。特派員の手順は次の通りである。

- i. 課題明示： 4人グループそれぞれに番号をふり、課題を与える。
- ii. 個人思考： 学生は一人で考え、質問に対する自分なりの回答を準備する。
- iii. 集団思考： グループで取り寄せ、グループで理解を共有させる。特派員の派遣先を指示する。取材の所要時間を指示し、出発を合図する。特派員は派遣先を取材する。受け入れグループは精一杯分かりやすく、グループの考えを特派員に説明する。帰還を合図し、特派員はグループに報告する。メンバーは特派員の貢献に感謝する。

(3) 「集団討論」段階：第7-13講

- ① 読解段階のまとめとして、「論理的な文章の構成と LTD 過程プラン」を提示し、集団討論を行うときにも、LTD のステップを活用できることを伝えた。
- ② 集団討論の概略を知らせ、授業にボランティアで参加した4年生による集団討論を見学させた。彼らは本授業を昨年度受講した4年生であり、実際の教員採用試験で集団討論を体験していた。集団討論の問題は「子どもが抱える本質的な課題の一つとして『学ぶ意欲の低下』が述べられています。学校の教育活動の中で、生徒の学びへの動機づけや学習喚起を図るためにはどのような取り組みが必要だと考えますか。具体的な例を挙げて討論しなさい」であった。
- ③ 集団討論を行うための準備を行った。実際の試験では、討論の直前に問題が示され、10分で討論準備をしなければならないが、教職教養等の学習が不十分な3年生には、資料等を使った準備が必要であった。そこで、問題を2問与え、まずは自分で考え、班で話し合うことで、二週間分の討論ができるような準備をさせた。2問与えたのは、班を2分割し、いずれかの問題で討論役を行うためであった。討論役でない場合は、周りで見学し、コメントする役割を担った。問題は、「豊かな心の育成が叫ばれているが、思いやりの心、感動する心をどのように育てるか、全員で討論しなさい」「本県の子どもの体力の現状は、全国と比較して低位であり、その向上が課題となっています。このことについて全員で討論しなさい」であった。
- ④ 準備した2問についての討論を二週にわたって実施した。クラスを三つのグループに分け、各グループの半分が討論役、半分が見学とし、翌週は役割を交代した。また、各グループには、試験官役を2名ずつ置いた。試験官役は、実際に集団討論試験を経験した4年生がボラ

ンティアで参加し務めてくれた。

- ⑤ 一通り集団討論の方法を理解できたので、次の2問は、授業時間外に各自で準備を行わせた。問題は、「各教科等の指導にあたって学習活動の流れの基盤である言語に関する能力を重視する必要性について述べています。児童生徒の言語活動を充実する方策等について討論しなさい。」「教員による体罰は、児童・生徒の心を深く傷つけます。現在、体罰によらない教育の必要性が改めて強く求められています。このことについて、全員で討論しなさい。」の2問であった。新たな2問の討論の際には、前回までとは異なる新たな三つのグループを作り、馴染みのない集団での討論を体験できるようにした。

(4) 「小論文」段階：第14-15講

- ① 「論理的な文章の構成とLTD過程プラン」を再提示し、LTDのステップを活用して小論文を書くことを確認した。小論文の設題は、「教員として必要な資質・能力とは、どのようなものですか。あなたの考えを述べなさい。また、これを高めるために、あなたはどのようなことに取り組みますか。あなたの教育理念をふまえて、具体的に述べなさい」であり、文字数は1,000文字～1,200文字とした。
- ② 文章構成を立てるために、まず考えるべき視点を確認した。「教員として必要な資質・能力とは?」「あなたの教育理念(目的・方針)は?」「あなたの取り組みは?」の三点であった。その三点についてまず一人で考え、その考えを班で交流した。その際、「取り組み」(step4)を2つか3つ考え本論に書くことと、関連づけ(atep5・6)を意識することも伝えた。その後、文章構成プリントに、箇条書きで構成を記入した。
- ③ 文章構成プリントをもとに、パソコンで小論文を作成した。時間は60分であった。ほとんどの学生が60分で小論文を完成させることができた。授業中に間に合わなかった4名も翌日の締め切りまでに提出することができた。一例を巻末の資料1に示す。
- ④ 最後に、15講のふり返しを行った。まず一緒に活動した班員に感謝の言葉を述べ合った。その際、お互いの成長したところや素晴らしいところなどにも言及するように伝えた。その後、授業記録紙に感想を書かせた。

4. 結果と考察

(1) 授業の到達目標

授業の到達目標4点について、結果と考察を述べる。

- ① 協同による活動性の高い授業に、積極的に参加できる。
授業15講の出席率平均は、93%であり、提出物は100%提出できた。授業態度や授業記録紙からも、積極的に参加していたと判断できる。
- ② 協同学習の基本的な理論を理解でき、代表的な技法を実践できる。
代表的な技法として、「ラウンドロビン」「シンク=ペア=シェア」「ジグソー」「特派員」を体験的に理解することができた。小論文の中で、協同学習の価値に言及したり、今後自分の授業で使用したい技法として、授業の中で体験した技法が挙がっていたりしたので、この授業で必要な理論の理解と実践は修得できたと考える。
- ③ LTDを実践し、文章作成や討論に活かすことができる。
分割型LTDを実践したことで、討論場面で、主張・根拠・関連づけを意識した発言がなされ

た。また、集団討論冒頭の、問題が出された背景を述べ合う場面では、関連づけの中でも、Step.5の「知識との関連づけ」を意識することが重要であることに気づくことができた。小論文作成においても、文章構成を立てる際にLTDのステップを活用したことにより、集中して短時間で作成することができた。

- ④ 学習内容を自己と関連づけ、大学生活を豊かに過ごす方法を考え実践することができる。最終講で書いた授業後の感想の中で、自己との関連づけが活発になされていた。そのいくつかを以下に示す。

(2) 授業後の感想

授業に対する学生の感想より、授業効果を検討する。以下に第15講の授業記録紙から主なものを列記する。

- ① 文章構成を理解できた。今までの私は、文章の構成はバラバラで、何が言いたいのかははっきりしなかったが、小論文作成の際、文章構成を学ぶと、自分の主張がはっきり見えてきたと感じた。まだまだ文章は稚拙なので、これから文章を書いて磨いていきたい。
- ② 成長したと思う点は、LTDのステップで物事を組み立てることができるようになったことだ。元々話すことは嫌いではないが、順序立てて話すことが苦手だった私にとっては、この講義のおかげで、少し順序立てて話すことができるようになったし、自信もついてきた。教職学習会にもなるべく参加して、採用試験に向かってがんばろうと思う。
- ③ 今回のグループは、社会科、公民科で今まで見たことはあったが、他の授業で話すことがなかったため、最初はとても緊張した。でも、授業を通し、話すようになったことで、教職の中で新たなつながりができた。これを築いてくれたのは、討議法の前半の協同学習や、毎回の授業の始めのグループでの挨拶であると思う。自分たちからでは築けなかったつながりを先生の授業の中で意識的にすることで、つながりつくることができた。今回学んだ協同学習は、生徒を主体的にさせ、つながりをつくる上でも良いものだったと思ったので、今後私も使えるようにしていきたい。
- ④ この授業の中で一番印象的だったのは、関連づけが関連づけを生んだ瞬間だ。体罰についての集団討論の中で、部活での体罰の例が一つ出てきた後、次々に自分が部活中に体罰だと思ったことが挙がり、体罰とは何かと言う意見が捕捉され、まとまったときに、これが関連づけが関連づけを呼ぶということかと感動したのを覚えている。
- ⑤ 班員の方々一人ひとりに感謝の言葉を述べるのはとても照れくさかったが、自分が言われた言葉は嬉しいものばかりであった。自分が思っていることを素直に伝えることの大切さを改めて学ぶことができた。これは、周囲の日頃お世話になっている方々や家族といった大切な人に対してこそ、行わなければならないと思った。
- ⑥ 今までの講義で学んだ「ジグソー学習法」や「LTD」を他の科目の模擬授業で取り入れることができたことや、集団討論がどのようなものなのか、また、4年生の先輩から今の自分には何が足りないのかを指導していただいたことが良かった点だと思う。
- ⑦ 私は、発言をする際、自分の主張はあったが相手を納得させる根拠がなかったので、討議法の授業を通して、どう相手を納得させるのかを勉強することができた。
- ⑧ 集団討論や小論文のほか、ジグソーもやったりして、自分の表現力、話すことでも書くことでも、その両方を少しでも伸ばすことができたのではないかと思う。小論文は、一時間で書

けるのか結構不安だったが、思いの外すんなり書き終えることができたのも、その成果だと思う。

- ⑨ 実際に集団討論を2回経験することができた。1回目は緊張してしまい、自分の思うような発言や討論を行うことができなかった。4年生の先輩方の助言や、討論を行っているメンバーの様子を見て参考にしながら、集団討論の一連の流れをつかみ、1回目よりも2回目の方が、より具体的に教師の立場に立った視点で主張することができた。しっかりと教育に関する時事ネタや、自分が希望する市町村・自治体の教育政策について、自分から調べて情報を集めていかなければいけないことに気づいた。

(3) LTD 基盤型授業モデルについて

安永・須藤(2014)が提案した LTD 基盤型授業モデルは、本教職科目「討議法」においても「読解」「集団討論」「小論文」といった言語技術を磨く上で有効であったと推察できる。

「読解」においては、分割型 LTD を体験することで、LTD 過程プランの8つのステップを理解することができた。例えばステップ3の「主張の理解」では、著者が伝えたいことを自分の言葉でまとめ交流したのだが、文章からの抜書きを読むのではなく、自分の言葉で説明することにより、主張を理解することの本当の意味に気づくことができた。また、各自の関連づけを交流する活動を通して、同じ文章を読んでも様々な捉え方や考え方があることに気づくと共に、表現することの楽しさや価値を味わうことができた。

「集団討論」においては、LTD のステップの中でも、「主張・根拠・関連づけ」を意識して討論することができた。また、討論を繰り返す中で、それぞれのステップの持つ価値にも気づくことができた。例えば、意見を言うときに主張を一番に述べると、他の討論者に何を伝えたいのかが話の冒頭でつかめるので、他の討論者は、その人の話が終わるまでに次の意見の準備ができ、他の討論者に対する配慮にもなるということに気づいた。また、集団討論で「体罰」の問題を取り上げたとき、討論者それぞれが持つ「体罰」の捉え方が異なっていたので、言葉の意味を確認する必要性にも気づくことができた。

「小論文」では、集団討論同様、「主張・根拠・関連づけ」を意識して書くことができた。この授業を受けるまで、文章構成を立てずに行き当たりばったりで文章を書いてきた学生が少なからずいた。文章構成を立てることは難しい作業であるが、ステップを活用したこと、グループで話し合いながら行ったこと、文章構成プリントを準備したことで、成し遂げることができた。また、文章構成を元に小論文を60分で完成できたことは、クラス全体が小論文を完成させるという一つの目標に向かって集中して取り組めた成果だと考える。

5. おわりに

この授業を通して、学生同士のつながりが強まり、教員採用試験に向けて、授業外での取り組みが始まったことが一番うれしい。ここで習得した LTD を、自分たちの授業や生活に活用し続けてほしいものである。また、4年生がボランティアで試験官役を務めてくれたように、来年度も、今回の受講者がその役を引き継いでいてくれることを願っている。今年の教員採用試験の取り組みや結果から言えることは、教員採用試験で合格を勝ち取るためには、個人で知識を増やすだけではなく、学生同士の横や縦のつながりを作り、切磋琢磨していく環境が不可欠である。その一端を担えるように、来年度も授業改善をしながら取り組みを進めていきたい。

引用文献

光村出版 (2016) 中学校『国語1』

須藤文・安永悟 (2011) 読解リテラシーを育成する LTD 話し合い学習法の実践：小学校5年生国語科への適用. 教育心理学研究, 59(4), 474-487.

須藤文・安永悟 (2014) LTD 話し合い学習法を活用した授業づくり：看護学生を対象とした言語技術教育 初年次教育学会誌, 6-1, 78-85.

杉江修治(2004) バズ・単元見通し学習の理論と実践事例. 一粒社.

安永悟 (2012) 『活動性を高める授業づくり：協同学習のすすめ』医学書院.

安永悟・須藤文 (2014) LTD 話し合い学習法. ナカニシヤ出版.

安永悟・須藤文・松永有紀子・徳田智代 (2014) LTD を基盤とした対話中心授業モデルの検討：批判的思考の育成を手がかりとして 初年次教育学会第7回大会発表要旨集 98-99.

資料 1. 学生が作成した小論文

【学籍番号】

【名前】

教員として必要な資質・能力とは、どのようなものですか。あなたの考えを述べなさい。また、これを高めるために、あなたはどのようなことに取り組みますか。あなたの教育理念をふまえて、具体的に述べなさい。

☆1,000 文字～1,200 文字

【序論】

私は児童生徒が楽しく安心して学校生活を送るうえで、人間関係や学習環境が重要な役割を果たしていると考えている。そのため児童生徒が互いを思いやり、他者と協調しながら学習や活動に取り組むことのできる人間関係づくりや、助け合いながら学習できる環境づくりを基盤とした教育を行っていききたい。そのためには教師自身が教師同士、学校全体、家庭や地域と連携して児童生徒を育てていく必要があり、信頼関係の構築が教員として必要な資質・能力であると考えている。

【本論】

信頼関係を構築するために私は3つの取り組みが必要だと考える。1つめは気持ちの良い挨拶である。気持ちの良い挨拶は、相手を認め大切に思っていることの意味表示であると私は考える。また挨拶を行うことでコミュニケーションのきっかけとなり、人との繋がりをつくることができる。私自身グループ活動の際、メンバー同士で気持ちの良い挨拶をきっかけに様々な話し合いができ、活動をスムーズに行うことができた経験が多くある。そのため気持ちの良い挨拶を行うことを意識したい。

2つめは傾聴である。傾聴は相手をしっかりと見つめ向きながら話を聴くことで、相手を思いやり、尊重していることを表す。教育現場では教師と連携するだけでなく、保護者や地域住民など様々な人と関わる必要がある。また児童生徒の立場に立って教育を行っていくことが求められる。そのためには様々な人の意見を聴き、相手に共感して話を聴くことで、自分には無かった考え方や価値観が見え、何より相手が安心して話すことのできる環境をつくることに繋がると考える。

3つめは自己主張である。自己主張と述べたが、常に自分の意見を貫き通すばかりでは他者との連携が求められる教育現場では独りよがりの教育になってしまうと考える。しかしただ周りの意見に同調することもあってはならない。相手を思いやって自分の意見をしっかりと述べることで、相手は自分を尊重してくれていると感じるのではないだろうか。私自身も高校時代、大学受験の志望校選択などで担任に話を聴いてもらった時にそのように感じた。私自身が1つの考えしか持っておらず、しかし担任はしっかりと私の話を聴いた上でアドバイスをしてくれた。これにより、私の視野も広がり今の自分があると感じる。信頼関係を築く上で先ほど述べた傾聴を基盤として相手の意見を尊重し、自分の意見も主張していくことが重要だと考える。

【結論】

以上の3つの取り組みが信頼関係を築く上で必要だと考える。児童生徒を育てていくためには多くの人と協力することが必要である。私が長崎県の小学校教員になることができたなら、多くの人と信頼関係を築き連携しながら、児童生徒が楽しく安心して学校生活を送ることのできる人間関係づくりや学習環境づくりを行っていききたいと考える。

(1142 字)